

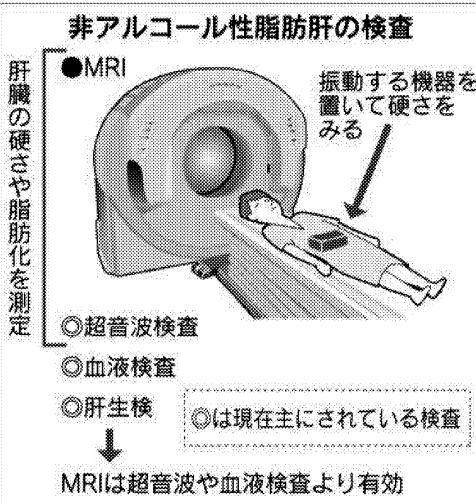
脂肪肝診断にMRI有効

横浜市大が確認 胸に振動する機器

横浜市立大学の今城健人助教らの研究チームは、悪性の非アルコール性脂肪肝の診断に、磁気共鳴画像装置（MRI）が有効であることを確かめた。現在は超音波や肝生検を組み合わせて診断する施設が多いが、肥満の人では検査できなかつたり、患者の負担が大きかつたりという問題がある。MRIで病気の進行度を把握することで、肝生検をする患者を減らせるといふ。

非アルコール性患者負担減らす

MRI検査の際、胸のき、肝臓で反射された波を読み取る。健康な軟らかく組織を青く、脂肪肝で線維化して硬くなつた組織を赤く可視化し、具体的な数値を表示する。MRIは超音波や血液検査より有効



MR-I検査の際、胸のき、肝臓で反射された波を読み取る。健康な軟らかく組織を青く、脂肪肝で線維化して硬くなつた組織を赤く可視化し、具体的な数値を表示する。MRIは超音波や血液検査より有効

同大で診察した患者142人と健常な人10人を対象に、それぞれMRI検査により、線維化の進行度を4段階に区分。肝生検により、線維化の統計学的に解析したところ、1が最高の相関係数は超音波で0・78、MRIは0・80。

92、MRIで0・80、超音波で97だつた。線維化のどの段階でもMRIが超音波にまさつたといふ。

肝臓の硬さの目安となる酵素なども血液検査で調べたが、MRIが最も肝生検の結果と相関していた。脂肪化においても同様の結果が得られた。今城助教は「超音波よりMRIの方が有用であることが示せた」と話す。

MR-Iで進行度を調べることで、症状が最も進んだ人だけに肝生検をするなど、患者負担を減らすことができるといふ。従来は特別なソフトウェアがなければMRIでは検査できなかつたが、最近のMRIではソフトが標準装備されているといふ。

同大によると、成人男性の約30%が脂肪肝で、うち非アルコール性脂肪肝は6~7割だといふ。アルコール性の中でも、1~2割が悪性でがんになりやすい脂肪肝だ。安い超音波検査は肥満の人や肋骨の間が狭い人ではできず、血液検査だけでは確定診断できないと

(今城助教)という問題

ある。

肝生検は入院し、針を刺して調べるため患者負担が大きい。研究チームは今後、多くの施設でMRIの有用性を確かめる臨床試験を実施するほか、治療前後にMRIを実施して効果を確かめたいとしている。将来的には肝生検を一部しか測定できず、データを蓄積する方針だ。

(藤井寛子)